

アメリカでロハス関係者に会った時、「日本の方がロハスが進んでいるのよ!! 私たちは、日本でやっていることをアメリカでやっているのよ!!」と言われたことがあります。すなわち、日本がロハスの本家であるとの、アメリカのロハス関係者の考え方です。確かに、農耕民族の日本人は自然と一体化した生活環境で育ち、事実、ロハス志向の割合はアメリカ人より日本人の方が多いという調査データがあります。彼らの話を色々聞いていると、日本の伝統・生活慣習がロハス的であるとか、日本の自動車の燃費の良さや、日本製電気製品の省エネ効率の高さのことを言っていました。

そこで、ロハスとアメリカと日本の関連性を、私なりにまとめてみました(六車流：流通理論)

日本の江戸時代は真正ロハスの時代

日本の江戸時代は、鎖国状態で3,000万人の人口を小島国で養いました。しかも、260年間の競争のない社会は、産業と文化が栄え、日本文化が確立した時代でもありました。資源が少なく国土の狭い日本は、職人芸、ものづくり等の創意工夫により英知を結集して、かつ、自然と生活を一体化させ、農耕民族の良さを発揮し、「もったいないの精神」で豊かで文化的な国家を形成しました。また、ヨガ、漢方薬、精神道場等の面も発達していました。正に、ロハスの概念を生活面で実践していたのが江戸時代の日本です。例えば、新品の着物 仕立て直して再利用 古着として再利用 寝間着に再利用 おむつとして再利用 雑巾として再利用 最後に肥料とするというように、1つの物を大切に利用し、かつ、別目的に再利用するシステムは、ロハスそのものです。現在の大量生産 大量消費 使い捨て利用から見ると、もったいない!! の社会です。

現在のアメリカは、大量生産 大量消費 使い捨て利用の社会であり、地球上の資源に限度があり、かつ地球温暖化が進むと、持続可能な社会ではなくなる危険性を持っています。そこで、ロハスの概念がアメリカの特定の人々から言われ始め、今や、科学的裏付けにより、社会や国家が地球環境に配慮した行動をとるようになりました。また、地球だけでなく人間の肉体的かつ精神的な健康を保つことも、大切な要因として組み込まれるようになっていきます。日本は今、アメリカの大量生産 大量消費 使い捨て利用を模倣して、本来の日本人が持つロハスの精神を忘れていきます。アメリカのロハス関係者が言う、日本人の方がロハスが進んでいるとの考え方は、今の日本ではなく江戸時代及びまだ日本が日本の風土に適した伝統的生活をしていた古き良き時代のことを言っているのです。

日本の企業は省エネ産業

日本は資源のない国ですので、教育水準の高さと勤労意欲の高さによって、創意工夫志向の産業が育ちました。特に、省エネのシステムは世界一です。資源がなかった事が原因とはいえ、結果的には地球環境に優しい産業が成立しました。確かに省エネ技術は、資源のない日本で、日本人の生真面目な職人技術と農耕民族の気質から生まれた世界に誇る最先端技術です。トヨタやホンダを中心とする日本の自動車産業、松下電器やソニーを中心とする日本の家電産業は、正に、日本を代表する省エネ産業です。アメリカの自動車産業は資源大国であるため燃費に対する配慮は少なく、日本車はアメリカ車と比較して2倍の効率を示しています。

その意味において、日本の企業はアメリカの企業に比べて、ロハス企業と言うことができます。しかし、よく考えてみると、日本の産業及び企業の省エネ技術は優れているが、あくまでもアメリカ型経済の大量生産 大量消費 使い捨て利用の延長線上での省エネやローコストや緑化等の、アメリカ型経済の技術改良に過ぎません。自らが地球環境を悪化させ、その悪化の度合いを少なくしているのが、日本企業や日本産業です。いわゆる「マッチ・ポンプ」の位置づけです。でも、日本の自動車産業は、CO₂を吸収しO₂を排出する自動車を開発中であり、それが成功した時は、真正ロハス企業になります。期待しています。

日本の未来はロハス国家

以上のように、日本は伝統的なロハス精神の国家であり、かつ、技術的にもロハス技術の最先端国家です。この2つの分野は日本の得意分野であり、この日本人が持つ固有の特性を活かすならば、日本の未来はロハス国家となり、世界の持続可能な経済を支える、尊敬されうらやまれる国になれます。